第63回　二十五三昧会

「僧侶が自分の父を看取るとき」

―私は自分のグリーフ（悲嘆）と、どう付き合えたのか―

1月27日（日）

どなたも参加自由

場所：本堂　講演会 14時～16時／交流会 16時～18時

講師：浄土宗願生寺住職　大河内　大博　上人（おおこうち　だいはく　しょうにん）

大河内大博さんは39歳の浄土宗のお坊さんです。終末期の方を訪問したり、悲嘆に暮れる遺族に寄り添うなどの活動を22歳のころから始められ、30歳の頃に「浄土宗平和賞」を受賞され、仏教界でも注目される若手のホープです。2017年8月、自分のお寺の住職（実父）が末期で打つ手なしという状態の「すい臓がん」であることを告げられます。多くのがん患者を看取った経験上、話ができるのは8月末までと覚悟しました。一番忙しいお盆の時期でした。当時、副住職だった大河内さんは、一人で檀家回りをし、そのかたわら、在宅を希望するお父さんのために介護ベッドとトイレの設置を手配し、母や二人の姉とともに看病の態勢を整え、お寺（自宅）に戻って来てもらいました。お父さんの体調を見計らいながらお寺の引き継ぎ事項を聞き、記録したそうです。親子としての会話を交わす間も無く9月4日、お父さんは息を引き取られました。

大河内さんは「研究者・臨床家としての視点で語ってきたものが、「一人称」で悲嘆を経験し、また語りも変化してきているように思います。」と語られます。今回は「すい臓がん」のお父さんを看取られたありのままをじっくりとお聞きしたいと思います。

講師プロフィール

浄土宗願生寺住職
大河内 大博 上人

2001年から病床訪問、2006年から遺族支援を開始。市立川西病院臨床スピリチュアルケア・カウンセラー、上智大学グリーフケア研究所主任研究員、医療法人社団日翔会チャプレンを経て現職。その他、臨床仏教研究所特任研究員、高野山大学非常勤講師、遺族会「ともしび」「てのひら」を主催する「いのち臨床仏教者の会」の副代表もつとめる。著書に『今、この身で生きる』（ワニブックス）、『グリーフケア入門』（共著・勁草書房）、『「臨床仏教」入門』（共著・白馬社）など。

◆参加費無料・予約なし! どなたでも自由に参加OK! 詳しくはお寺までご連絡ください。（平日10時～16時）

お問い合わせ―観瀧山 岡本寺（こうほんじ）TEL.072-793-0203
〒666-0121 兵庫県川西市平野1-33-14　TEL/FAX072-793-0203　mail：vyku11976@nike.eonet.ne.jp
ホームページ https://www.kohonji.jp または 川西市岡本寺 検索

2019.1.27.No.63